

多民族社会は人材の宝庫

坂中英徳

単一色の濃い民族は地球時代を乗り切れない

日本の人口問題は日本人の数の激減にとどまらない。それよりもっと深刻な質の問題がある。政治を筆頭に、経済、行政、教育、学術、ジャーナリズムなどの各分野で優秀な人材が枯渇しつつあるのだ。ここにその何よりも雄弁な証左がある。

まさに今、人口崩壊という未曾有の国家的危機に臨み、時代は革命家を必要としている。しかし、天下国家を考える日本人、未来を見通す日本人、地球的視野で考える日本人がいないのだ。

150年前の幕末から明治にかけての激動の時代には、憂国の士や革命家が綺羅星のごとくいた。当代の日本も国家の浮沈がかかる革命の時代である。なのにどうして平成の世に国家的危機を救う救世主が現れないのか。国家百年の計を立てる思想家が出てこないのか。

ただでさえ均質性の高い民族であるのに、それに輪をかけた画一化教育で育った日本人は、型破りの発想ができない「平凡な民族」になったということか。総じて日本人が小粒になったことは否めない。

もう一つ、地球上を舞台に列強が角逐を演じる地球時代に入って、単一色の濃い民族の弱点、たとえば民族問題や宗教問題がからむ難局に柔軟に対応できないところが目立つ。

ひ弱な日本人が増え、タフな日本人が減り、民族の総合力としての日本人のパワーが急速に落ち込んだように感じる。このままでは日本の政治力・外交力・経済力の弱体化に歯止めがかからないのではないかと危惧する。

生物の世界では純種より雑種のほうが生命力が強いとされる。交雑によって品種が改良される。人間の世界も同じで、多様な民族から成る社会のほうが、民族の純血性を誇る社会よりもパワフルであり、生きながらえる確率がいいといえるのではないか。

地球時代の日本の生き残りをかけて、世界の諸民族を移民の地位(将来の国民)で迎え入れ、国民の構成を一段と多民族化させるべき時がきた。1千万単位の将来の国民を受け入れ、多彩な顔を持つ国民に変わるのだ。

それを担保するために移民法(新法)を制定し、「日本の移民政策は世界各国からバランスよく移民を入れることを鉄則とする」旨を定める。移民法に基づき、公平な立場から、特定の国・地域の出身者に移民が集中しないよう留意し、年間の国籍別移民受け入れ枠を決定する。そのうえで、世界各国との間で移民協定を締結し、広範囲の国から多彩な人材を受け入れる。そうすれば国民の多民族化がいっそう進み、社会の多様性がいちだんと増す。

世界の人材が集まる多民族社会

先祖代々の日本人が社会の成員のほぼ100%を占める単一民族社会は全会一致を旨とし、激動の時代をダイナミックに乗り越えるのが難しいのではないか。世の中の大勢に従う人が大多数を占め、異端者や革命家は住みづらいのではないか。わたし自身が異端者・革命家の典型であるから彼らの気持ちがよくわかる。

いっぽう、移民開国で地球上の民族が勢ぞろいした多民族社会になれば、それぞれの民族の持つ独自の発想や鋭い感性や奥深い思考が競い合うエキサイティングな社会へ移行する。多士済々が切磋琢磨し、巨星や異才が輩出する社会である。

魚、貝、肉、野菜、きのこなどの食材が入ったなべ料理が多くの素材の味がしみこんで風味を増すように、多民族社会は多彩な顔ぶれが八面六臂の活躍をする人材の宝庫である。

多民族社会の日本料理は、いろんな民族の料理のエキスが加わって味わいの深いものになる。メニューもいっそう多彩になり、世界の料理の通が認める世界料理の頂点に立つ夢がふくらむ。

話題を変える。日本人と移民が和気あいあいですごす社会を創るには、まず幼児教育および初等中等教育のあり方を根本から見直す必要がある。いま日本の幼稚園、小学校、中学校で行われている「同じタイプの人間」を生み出す画一化教育はやめる。子供の個性と多様性を重んじる教育に改める。

日本人の子供と移民の子供が天真爛漫に遊ぶ社会をつくるため多民族共生教育に力を入れる。「人類は多にして一」という人類社会の本質を子供に教え込む。

多数派の日本人は少数派の移民の文化を尊重しなければならない。日本が受け入れた移民がその民族的特性をいつまでも持ち続けられる社会づくりを目ざす。そうしないと、せっかく移民を入れても多様性あふれる社会は形成されない。

以下は、移民政策が日本の若者に及ぼす影響と効果である。

- ①移民と親しく付き合うことで、日本の若者は日本人としての誇りを持つようになるとともに、異なる民族への寛容の心がはぐくまれる。
- ②移民の勤勉さに刺激を受け、日本の若者は移民にライバル意識を燃やし、切磋琢磨する。
- ③移民との交際を通じて異文化交流のノウハウを身につけた日本の若者の中から海外に雄飛する者が増える。
- ④家族愛や祖国愛が豊かな移民の生き方を見て、日本の若者は家族の絆や愛国心の大切さを学ぶ。
- ⑤異民族との結婚に偏見を持たない日本の若者の中から移民との結婚を望む者が増える。
- ⑥20代が中心の移民の新規加入により年金・社会保障制度の存続の見通しが立ち、日

本の若者は前途に光明を見いだす。

日本の子どもたちに私の夢を託す。いろいろな顔の民族と一緒にいるだけで幸せを感じる日本人と、すべての民族と対等の立場で付き合う日本人に敬意を表する移民とが一心同体で暮らす多民族共同社会を創成してほしい。

国際結婚が爆発的に増える多民族社会に胸が躍る

多民族社会において各民族間の平和友好関係を確立する最も有効な方法のひとつは、異なる民族間で婚姻関係を積み重ねていくこと、血縁関係を深めていくことだと考えている。

現代の日本人の外国人観を見ると、大量の異民族の流入も外敵の侵入も受けなかった歴史も幸いして、他の民族を「人間以下のもの」とみなす観念はない。外国人に対する恐怖心も排外的感情も希薄である。

むしろ、人種・民族に甲乙はないと考える日本人の心には、欧米諸国で見られるような根深い人種差別もない。何より外国人を懐に温かく迎える心がある。

たとえば、国際結婚について見ると、在日韓国・朝鮮人の結婚相手の約90%が日本人であることに代表されるように、人種・民族・国籍の異なる人と結ばれる日本人が比較的多い。

宗教についても、日本人は仏教やキリスト教など異国の神様を進んで受け入れた珍しい民族である。今も日本の至る所で八百よろずの神々が仲良く共存している。多神教の日本は移民の受け入れに最適の国といえるのではないか。

世界各国から魅力的な若者がたくさん日本に移住してくる。日本の若者と世界の若者の結婚が爆発的に増える。二世が続々誕生して超少子化に歯止めがかかる。そんな多民族社会を想像すると私の胸が躍る。

朝鮮半島出身の65万人の移民が画一社会で異彩を放った

今日、経済界、スポーツ界、芸能界などを見渡すと、在日コリアンの活躍が目立つ。医師、弁護士、公認会計士など専門職に従事する人も多い。

戦後の歌謡の世界は在日コリアンの存在を抜きにしては語れない。ソフトバンクの創始者の孫正義氏を筆頭に起業家が続出した。焼肉やキムチが日本人の好きな食べ物になったのも朝鮮半島出身者がいたからこそだ。

私たち日本人は、戦後日本に残った65万人の在日朝鮮人とその子孫が、日本の社会・経済・文化の発展に貢献したことを忘れてはならない。在日朝鮮人は画一社会のニッポンで異彩を放った。もし彼らがいなかったとしたら、血統的日本人が社会の成員のほぼ100%を占める、多様性に欠ける味気ない社会になっていたのではないかと思う。

もうひとつ言っておきたいことがある。日本人の歴史認識が厳しく問われるとともに在日コリアンの民族的アイデンティティがからむ、困難きわまる少数民族問題を解決の方向に導いた経験は、未曾有の規模で移民を迎えるときの日本人の自信につながると考えている。

わたしは法的地位の安定など日朝鮮人問題の解決の道筋をつけたことを生涯の誇りとする。朝鮮半島出身の65万人の移民がこれだけ大きな仕事をやった実績に照らすと、全世界から1000万人の移民を迎えると、その中からどんな偉材が現れるか、どんな偉業を達成するか、それを思うと期待に胸がふくらむ。

家族全員が三国語を話す日系ペルー人

わたしは最近、日系ペルー人のカブレホス・セサル氏と会って、日本の移民政策のことや、日本に住む日系人のことなどについて話をした。初対面で意気投合した。セサルさんは日本が大好きなペルー人。いや日本人というべきか。国籍はペルーだが、心は日本人である。

セサルさんは11の時に日本に来て、現在38歳である。通訳、翻訳の仕事をしており、スペイン語、ポルトガル語、日本語に堪能である。理路整然と話す知識人。スペイン人の血が入っているのだろう。好男子である。

奥さんも日系ペルー人である。14の時に来日。来日した時の年齢にセサルさんと3年の違いがある。この3年の差が大きいと彼はいう。彼女はペルー人としてのアイデンティティを確立してから日本に来たので、ペルー人としての意識が強いという。今もスペイン語のテレビを見るのを一番の楽しみにしているそうだ。

4人の子供に恵まれ、家では子供の将来のことを考えてスペイン語オンリーの生活である。子供たちは学校や外では日本語を上手に話す。セサルさんは、子供が日本語とスペイン語を駆使して国際人として活躍する夢を語った。

6人の家族全員が英語を含め三国語を話す国際人。私はこの在日ペルー人家族から移民国家ニッポンの家族のあり方を学んだ。移民時代の多言語社会の到来を予感した。

多民族社会は多言語社会

移民時代を迎えると、移民二世に対する母語教育に力を入れなければならない。移民一世が持っている文化や感性を移民二世に受け継いでもらうため、移民の第二世代に親の母国の言語を教える体制を整える必要がある。すなわち少数言語教育体制の確立である。

たとえば、移民二世が母国語や母国の文化を学ぶ「少数言語文化研究所」を東京外国語大学と大阪大学に設置してはどうか。この研究所は世界の少数言語および言語政策に関する研究を行うとともに、移民二世に対して少数言語を教える。研究員は、世界的な視野に

立って、世界の少数言語研究の第一線で活躍する若手研究者の中から選考する。

われわれ日本人は、親の母語を継承することによって初めて移民二世が民族的アイデンティティを保持し、世界に通用する人材に育つことを理解しなければならない。

また、旧態依然の日本語教育法を抜本的に改革しなければならない。たとえば、移民の母国の言語に配慮した日本語教育法の研究や、日本語の会話能力と漢字の読解力を短期間で外国人に身につけてもらうための日本語教育法の研究開発、移民の送り出し国においてその国の言語で日本語の基礎を教える日本語教育制度の導入など、大量移民時代を視野に入れた日本語教育のあり方についての研究を急ぐ必要がある。

移民の受け入れが順調に運ぶと、日本人と移民の間の交流が盛んになり、数カ国語を話す国民が増えるだろう。特に若い世代の間では、人種や文化の相違に魅力を感じる人が多数に及び、少数言語を学ぶ人や異なる民族と結婚する人が続出するだろう。

以下は、私が理想と考える2050年の移民国家日本の姿である。移民二世に対する日本語教育と母語教育を実施する体制が整備されており、日本人と移民のカップルをはじめ出身国を異にする人どうしの結婚が当たり前の時代になっている。移民二世や異民族間結婚で生まれた子供など約1000万人にのぼる国民が、日本語、親の出身国の言語、英語の3カ国語以上を話す「多言語社会」が成立している。多言語を駆使する日本人が世界各地に進出している。

究極の目標は永遠の世界平和

民族や文化の異なる人と人との平和共存の道は決して平坦ではない。世界の諸民族の共存共栄は人類の永遠の課題なのかもしれない。

しかしわたしは、平和を願う心はあまねく人類のDNAにインプットされているから、平和共存世界の実現の可能性はゼロではないと考えている。

一般論をいえば、自らの民族と文化に誇りを持たない国民は異なる民族と文化に寛容になれない。外国人はそのような国民に敬意を表さない。

日本が移民の受け入れで成功をおさめるためには、日本人と他の民族が互いの立場を尊重し合って生きる社会、すなわち多民族共生社会をつくる必要がある。

そのとき日本人に求められるのは、日本人としてのアイデンティティを確認するとともに、異なる民族を対等の存在と認めることだ。日本民族の根本精神を堅持するとともに、ほかの民族の固有文化を尊重しなければならない。

世界の民族が移住したいと思う国は、日本人が日本人としての誇りを持ち、移民が移民としての誇りを持てる社会である。

わたしは、移民国家日本の究極の目標として、世界のどの民族も成し遂げていない人類共同体の実現を掲げている。先祖代々の日本人のほか、地球上のさまざまな民族が日本国民として一つにまとまる社会だ。

世界の主要民族は、大なり小なり「エスノセントリズム」（民族的自己中心主義）の考えを持っている。しかし、今の日本人には自分たちが最も優秀な民族というような民族的優越感はほとんど見られない。世界の諸民族のなかでも日本人は謙虚な民族の部類に入るのはではないか。

加えて、日本人は古来、人類はもとより動物・植物・鉱物を含む万物平等思想をいっている。地球上に存在する人種・民族はすべて平等と考える日本人は、地球上のありとあらゆるひとびとが平和共存をエンジョイする世界を築けるのではないかと考えている。

多彩な顔を持つ日本人は人類共同体の創成を目ざす

日本人は百年かけて純種系民族から雑種系民族へ進化を遂げなければならぬと、私はつとに主張している。移民二世のオバマ米大統領が2009年1月の就任直後、ホワイトハウスで飼っている犬の血統を記者から尋ねられて、「この犬は雑種。私も雑種」と述べたことを鮮明に記憶している。含蓄ある言葉に感動した。

生物の世界では純種よりも雑種のほうが生命力が強いとされる。森林生態学者によると、多種多様の木々がまじって共棲しているから、森林は天災地変に遇っても生き残った一つの種から再生できるのだそうだ。

人間の世界も同じである。多様な民族からなる社会のほうが単一の民族からなる社会よりも生存競争でも危機の時代を生き抜く力でも優れているのではないか。

1000年以上もの長いあいだ島国のなかでいわば血縁者同士が緊密な関係を結んで生きてきた日本人は、自然と島国根性のかたまりの人種になってしまった。これからも移民拒否の姿勢を続ければ、人類の一体化が進む世界の潮流に乗り遅れた日本民族は時代から取り残され、あたかも孤島に住む化石人間のような存在になってしまうおそれがある。

さらに付言すれば、ほぼ単一民族から形成される社会は全会一致を旨とし、意外性やおもしろみに欠ける社会ではないか。ムラ社会の伝統が根強く残る閉鎖社会では、異端者や外国人の出る幕はなく、彼らは肩身が狭い思いをしているのではないか。

いっぽう、移民立国で地球上の様々な民族が社会のメンバーに入る多民族社会に変われば、それぞれの民族の持つ感性や発想が躍動する開放社会へ移行する。変わり者が大手を振って歩く時代を迎える。

移民国家に様変わりしてバラエティーに富んだ民族が国民を構成するようになれば、各民族の持つニューパワーが加わってたくましい国民へと変貌する。

多彩な顔を持つ日本人が人類共同体の創成を目ざして行進する近未来に思いをいたしている。

近未来の地球人への最高の贈りもの

今日の日本は、日本の歴史にも世界の歴史にも前例のない「人口ピラミッドの崩壊」という危機に直面している。日本国民の消滅につながりかねない一大危機だ。未曾有の危機を乗り越えるのに生半可な改革をいくらやっても焼け石に水だ。今の日本に必要なのは国の形と国民の生き方を根本的に改める革命だ。

千年に一回の移民革命を行う覚悟が国民に求められる。国民の総意で移民革命をやり遂げなければ人口崩壊に伴う日本の全面崩壊は避けられない。

日本人が日本列島から消えてゆく民族危機に臨み、平成時代の日本人が日本の歴史を書き換えるのだ。世界の若者に移民の扉を開放し、移民教育を熱心に行って日本国民に育成し、人口ピラミッドを正常な形に立て直すのだ。

人口秩序の回復には百年を超える時間がかかる。それは日本人の内なる敵との闘いでもある。国民は島国根性を克服し、移民を人類同胞として温かく迎える「地球人」に成長しなければならない。

日本文化史が雄弁に物語るように、日本人は外国の文化や宗教を寛容の精神で受けとめて自分のものにしてきた。日本文化は、日本人が世界の文化の精髓を取り入れて洗練されたものに磨き上げた「雑種文化」の優等生である。移民の受け入れも、和の心を持ち、尊大なところが少ない日本人なら成功に導けるだろう。

日本人が人類共同体社会を樹立すれば、それは世界平和への第一歩となり、近未来の地球人への最高の贈りものになるだろう。

以上のような移民国家の理想像と恒久的世界平和の夢を描いた最新作が、『新版 日本型移民国家への道』（東信堂刊）である。この本の刊行をきっかけに移民国家議論が大いに盛り上がることを期待する。